

拵へ、巾著のそこに六七寸廻りの丸き板を入、それにて右の鶉を入置、晝は其儘にて、夜分は燈の元にて、初には鶉の面計巾著の口をいだし、粟稗の類手に入是を飼候て、毎夜々右のとをりに取扱ひだんぐ、總身を巾著より出し啼せる也、又もとの巾著に入腰に提て、常々右のとをりに取扱ひにて、自然と手馴候、此仕込鳥の手馴ざるも有り、能く手馴るもあり、二三羽も同様に仕立、其内に思ふ通り不參もあり、子鶉は不宜、老鳥は荒く、野鳥の若鳥を見計り仕方宜、鶉に不限、放し飼の仕込、何れ若鳥の方宜敷、鳥を手馴よふに夜飼いたし、段々相馴れ、外に仕方無之、夜飼にて晝は水をして、人近き所へ居置候得ば、自ら人馴いたして、盛もはやく出るもの也。

〔飼鳥必用 下〕鶉

此鳥啼出しにクワ頭、チヨ頭、コキ頭三品有、鳥の形に海老脊、蟹脊、山形脊と三品有、醬、豆醬、椎醬、腐醬とて三品有、首に鶴首、雌鶴首、猪首とて是も三品有、尾にさし尾、半さし尾、海老尾とて三品有、府合に白府、赤府、ホケ府とて是も三品有、駿河、甲州、信州、奥州南部より、鶉江戸へ來る、諸國鶉を好、啼方の吟味同前也、クワ頭にて聲大きく、靜に長く引結びに玉を付、聲に光ある鳥ならば、何國にても上とする、音には色々の音をふくみ鳴故、先々の鳴方變化し、下音にて能聞人はまれ也、鶉の鳴様くわしく書記し度は思へ共、口に語り筆に認る通には、下音より高聲まで鳴ざる鳥のみにて、何れ世の人に、わらひ草の種ならん事をおそれで筆を止る。

〔鶉書〕一問でいはく、鶉の見鳥はいかやうなるがよく候や、答ていはく、見鳥のめき、さまぐ、ありといへども、あたる事不定なり、さりながら、かしら大きくながくして、はしねく、らず、す、めはし、くびながくむねいで、かたいかり、くちひろくどうあいながく、大小によらず、いろはほうよりむねまでかきいろにて、あかふよし、いかにも、ふだんかごのうちゑづかにして、とらへて見れば、鳥やはらかなるが上の鳥なり、かやうのとりには、ふとねおほきものなり、問ていはく、鳥